

## 統計データで見る MJIR

大石 哲也（東京工業大学）、杉森 公一（金沢大学）、杉原 亨（関東学院大学）、  
石井 雅章（神田外語大学）、森 雅生（東京工業大学）

### 1. 本発表の目的と課題

2012年に第1回目を開催した MJIR（Meeting on Japanese Institutional Research：大学情報・機関調査研究集会）は今回で9回目を迎えた。MJIRは次の2つのことを目的[1]とした研究交流集会である。

1. 機関調査の事例紹介や研究発表を通じて日本における機関調査の推進に寄与すること
2. 高等教育のみならず経営学や統計学、情報科学など、関連する分野の研究者や実務家、および大学の現場で活躍する教育者の方々を対象とした人的交流の促進とネットワーク形成

MJIRは、日本の高等教育機関および研究機関における機関調査に従事している、またはこれから従事しようとする大学教職員や研究者をはじめ、関連する企業や高等学校の教職員などの皆様を対象とした、広く開かれた集会である。

本稿では今までの MJIR を振り返り、MJIR を統計データから可視化し報告する。

表 1 MJIR の開催実績

	開催時期	開催場所
<b>MJIR2012</b>	平成 24 年 9 月 21 日～22 日	九州大学箱崎キャンパス 21 世紀交流プラザ (福岡県福岡市)
<b>MJIR2013</b>	平成 25 年 9 月 1 日～2 日	くにびきメッセ (島根県松江市)
<b>MJIR2014</b>	平成 26 年 9 月 1 日～2 日	北九州国際会議場 (福岡県北九州市)
<b>MJIR2015</b>	平成 27 年 7 月 13 日～14 日	岡山コンベンションセンター・ママカリフォーラム (岡山県岡山市)
<b>MJIR2016</b>	平成 28 年 7 月 12 日～13 日	熊本市国際交流会館 (熊本県熊本市)
<b>MJIR2017</b>	平成 29 年 8 月 19 日～20 日	国立研究開発法人海洋研究開発機構 (JAMSTEC) 東京事務所 (東京都千代田区)
<b>MJIR2018</b>	平成 30 年 8 月 18 日～19 日	国立情報学研究所 (東京都千代田区)
<b>MJIR2019</b>	令和元年 12 月 8 日～9 日	東京工業大学大岡山キャンパス (東京都目黒区)
<b>MJIR2020</b>	令和 2 年 11 月 14 日～15 日	東京大学駒場 I キャンパス (東京都目黒区) →COVID-19 の影響でオンライン開催

## 2. MJIRの振り返り

MJIRは表1に示すように開催時期や開催場所を変えながら今回で9回目の開催となった。当初はIIAI-AAI[2] (International Institute of Applied Informatics - International Congress on Advanced Applied Informatics : 先進的応用情報学に関する国際会議) との共同開催であったが、第6回 (MJIR2017) より単独で開催することになった。また、MJIRは事例紹介や研究発表を主としているが、発表以外の講演やワークショップも開催している。

### 2-1. IIAI-AAI との共同開催

第1回 (MJIR2012) はIIAI-AAIに含まれる国際会議 IRIM (International Conference on Institutional Research and Institutional Management : 現 DSIR[3] (International Conference on Data Science and Institutional Research)) と同時開催の形式で始まった。英語の発表である IRIM / DSIR と日本語の発表である MJIR が同じ会場で開催された。第5回 (MJIR2016) までは国際会議の開催時期と場所に依存していたため、9月開催だったのが7月開催になったり、開催場所が福岡市、松江市、北九州市、岡山市、熊本市と全国的に広がったりしていた。IIAI-AAI との共同開催であった回までは運営にかかる費用はIIAI-AAI から支出していたため費用を工面する必要がなかった。

### 2-2. MJIR 単独開催

MJIR の知名度が上がり、ある程度自由度を持って MJIR を開催するため、第6回 (MJIR2017) にIIAI-AAI との共同開催を止め、現在に至るまで単独で MJIR を開催することになった。MJIR の単独開催にあたり運営にかかる費用を工面する必要があり、2,000円の参加費を参加者から一律に徴収することになった。第7回 (MJIR2018) からは出展の仕組みも導入し、MJIR の開催規模を考慮して賛同企業の参加者に20,000円の出展費用を設定した。徴収した費用は MJIR の運営のみに使用し残金は次の回に繰り越す運用をしている。

MJIR は共同開催の頃から夏季に開催していたが、夏季は IR だけでなく多くの学会やイベントが開催されることから、第8回 (MJIR2019) から冬季開催に切り替えた。また、単独開催になってから発表者や聴講者ができるだけ集まりやすいよう開催地を東京に固定している。しかし、2019年から続く COVID-19 の影響で第9回 (MJIR2020) はオンラインでの開催とした。また2019年10月に日本インスティテューショナル・リサーチ協会 (日本 IR 協会) [4]が発足し、MJIR2020 の準備から MJIR は MJIR 実行委員会の元で運営されることとなった。

### 2-3. 発表以外の取り組み

MJIR はその目的にあるように事例紹介や研究発表の場を提供しているが発表以外にも表2に示すような講演、ワークショップ等のイベントを開催した。ほとんどは MJIR 開催中の1つのセッションとして開催したが、一度だけ特別企画として平成28年2月14日に石川県政記念しいのき迎賓館 (石川県金沢市) にてワークショップを実施した。

表2 事例紹介や研究発表以外のイベント

	区分	内容
MJIR2012	基調講演	内部質保証と機関調査を活用した大学の改善
MJIR2013	特別講演	青少年の成長からみる大学教育の在り方
	ワークショップ	機関別認証評価における大学情報の役割と活用
特別企画	ワークショップ	大学をどのように測り、評価し、アピールするか
MJIR2016	ワークショップ	大学評価と IR
	ワークショップ	全国版大学 IR 支援システムの構想検討
MJIR2017	ワークショップ	IR 業務を楽しく取り組むためには？パターン・ランゲージの手法から考える

### 3. MJIR に関するデータ

MJIR を運営するに当たって重要なアクターとして発表者、参加者、運営委員がいる。本節ではそれぞれに関して MJIR を統計データから可視化する。

#### 3-1. 発表者に関するデータ

図1に今までの MJIR の発表総数と発表回数の推移を示す。発表総数は単独開催になる前までは第5回（MJIR2016）が16件と最大であったが、東京開催になった以降3回（MJIR2017から2019）が20件前後、オンライン開催となった今回（MJIR2020）は34件と発表件数は伸び、9回の合計で146件集まったことになる。今回が7回目の発表という人がいる一方で、毎回初めて発表する人も多く、図2を見ると各回5割程度の発表が初めての発表で全体的にも5割強が初めての発表であることがわかる。

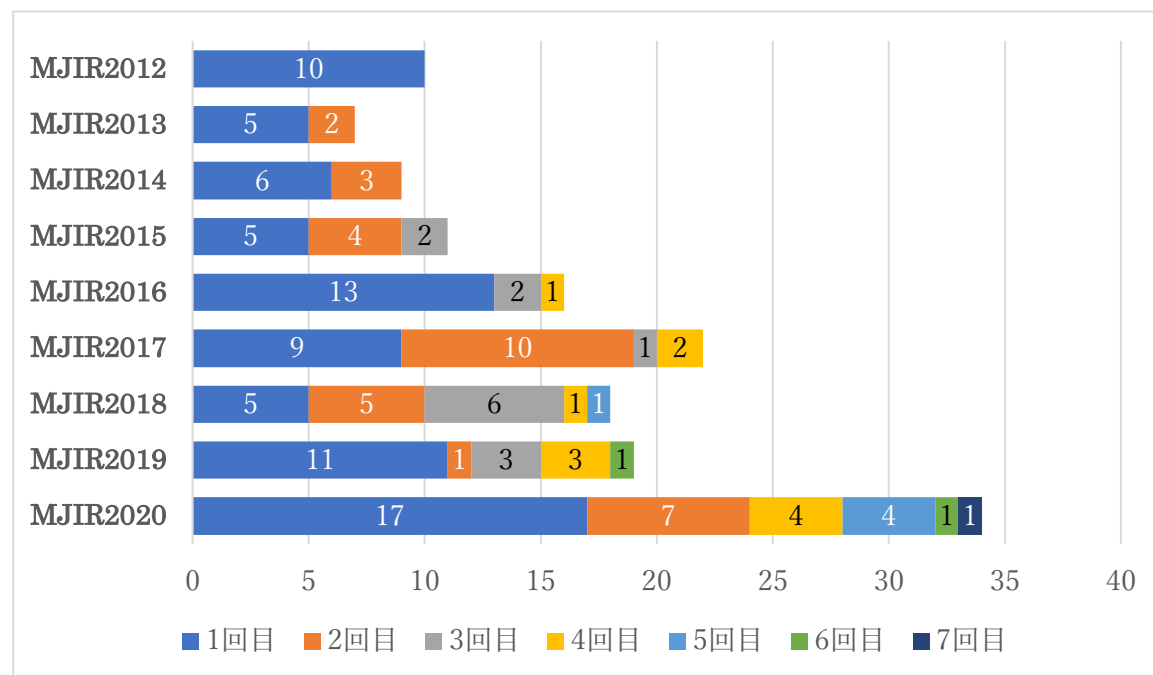


図1 発表総数と発表回数の推移

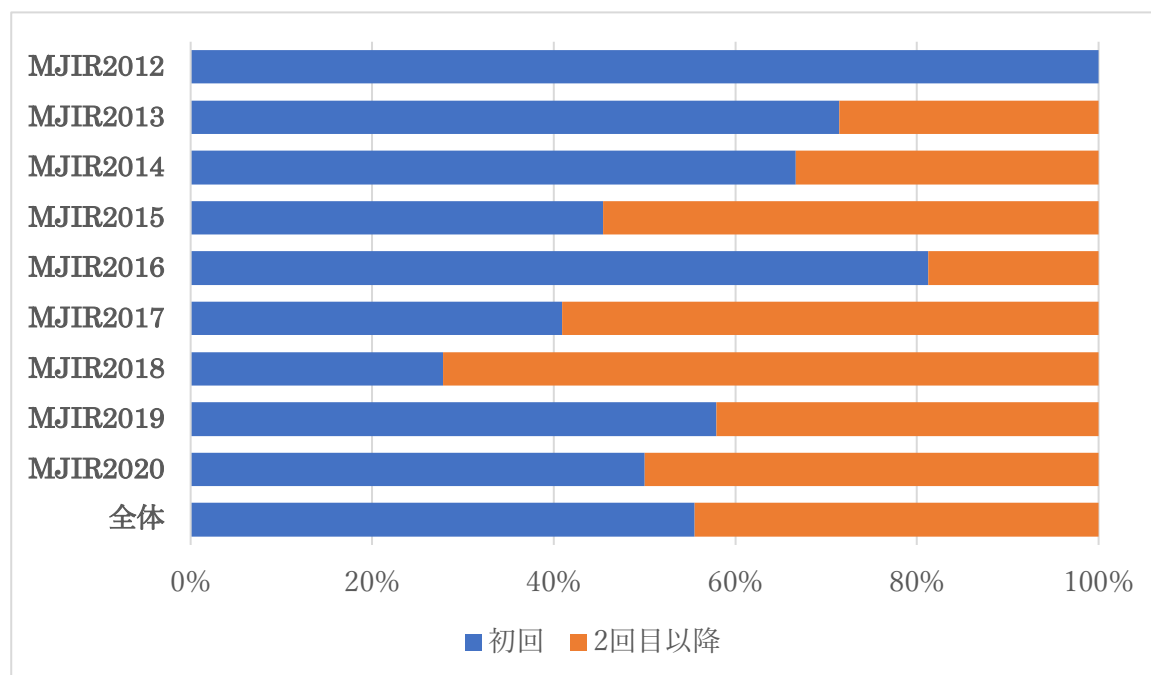


図2 初回発表者の割合

また発表タイトルを形態素分析し名詞を抽出してその出現頻度について調査した。抽出された名詞の数は1,346個(591種類)で、特に頻繁に使用された名詞を分類し表3に示す。表中の各名詞の横のカッコ内の数字は出現頻度である。11回以上出現した名詞は全て列挙し、10回以下の出現であっても特筆すべき事項がある名詞を列挙している。

11回以上出現し全般によく使われる名詞は「的(11)」を除きIRや大学に関する単語が列挙されており、発表者の関心がコンスタントにデータ分析や教育にあり、それらの活用やシステムの評価や事例に興味があるということが考えられる(表3-[A])。一方で学習(学修)に関する支援やアンケート調査に関する発表も近年増えていることも読み取れる(表3-[B])。

10回以下の出現であるが特筆すべき名詞として、質保証についてはコンスタントに発表されていることが読み取れる(表3-[C])。MJIRの初期段階では計画や組織などの単語が発表タイトルに使用されていた(表3-[D])。これは大学機関別認証評価や国立大学法人評価などの大学評価で収集したデータをIRに活かすような動きがあったことも一因であるかと思われる。最近では研究IR、中退予防、可視化に関する発表が増えてきており、特に新しい傾向として医学系の大学の発表が増えてきていることは出現している名詞から読み取れる(表3-[E])。特にMJIR2020ではCOVID-19による授業方法の制限によってオンライン授業に関するタイトルの発表が予定されており、出現した名詞からも読み取れる。

表3 発表タイトルに頻繁に使用された名詞の分類

	全般によく使われる名詞	当初よく使われていた名詞	最近よく使われるようになった名詞
11回以上の出現した名詞	[A] IR (38)、大学 (29)、分析 (26)、学生 (23)、データ (22)、評価 (21)、活用 (15)、教育 (15)、事例 (12)、 <u>的</u> (11)、システム (11)	特になし	[B] 調査 (20)、学習 (16)、アンケート (13)、支援 (13)、学修 (13)
10回以下の出現で特筆すべき名詞	[C] 質 (7)、保証 (7)	[D] 計画 (5)、組織 (5)、認証 (5)、大学院 (4)、機関 (4)	[E] 研究 (10)、授業 (9)、情報 (9)、中退 (6)、可視化 (6)、医学 (4)、オンライン (3)

### 3-2. 参加者に関するデータ

図3に参加者数の推移を示す。単独開催になる前、つまり第5回(MJIR2016)までは、会場の都合で50人程度の参加者であったが本当は参加したかったが人数制限で参加できなかった潜在的な参加者がいたことがわかっていたため、単独開催になった第6回(MJIR2017)以降は会場を徐々に広くしていくことで参加者を増やしていった。前述のとおり単独開催以降、参加費を徴収するようになったが、おそらくIRのニーズの多様化、開催地の東京のアクセス至便性等が要因で参加者が増えていくことになったものと思われる。初のオンライン開催となるMJIR2020では執筆段階で参加者数が不明であるが、出張の手間がかからないこともあり、昨今のIRへの関心度合いを考慮すると参加者数は増えるのではないかと予想している。

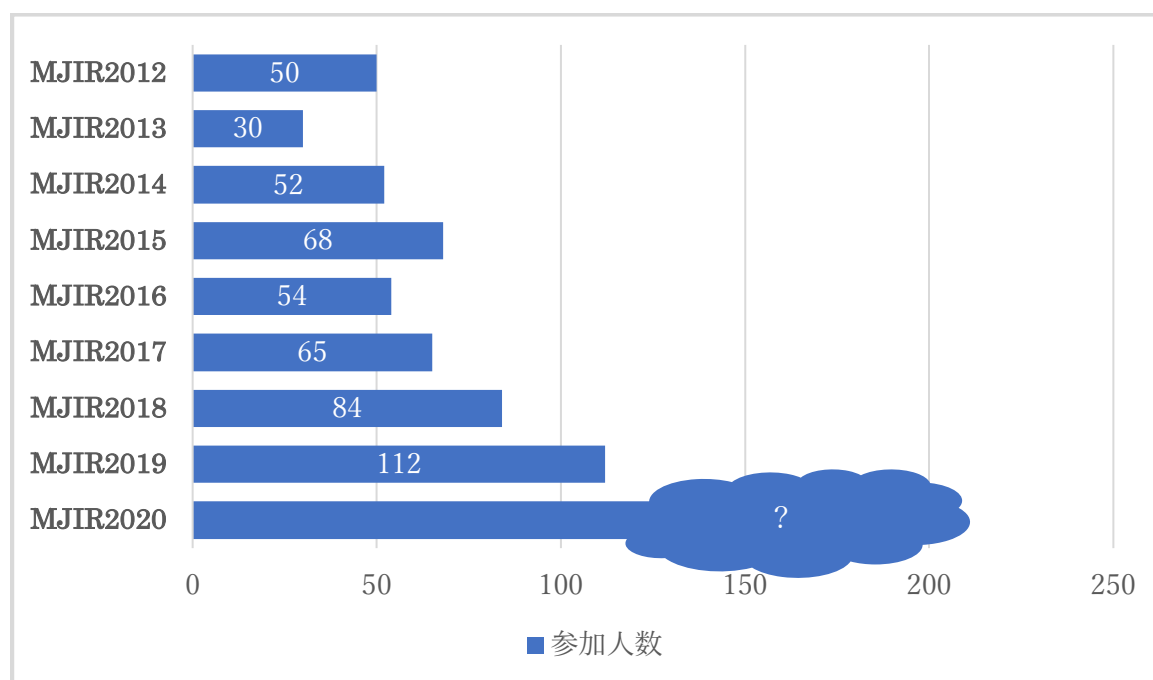


図3 参加者数の推移

### 3-3. 運営委員に関するデータ

MJIR では役職を設定し実質的に MJIR を運営する人員を配置してきた。過去にはプログラム委員長、総合委員長、運営幹事、顧問、編集委員、事務局長などの役職を設定していたが、MJIR2020 では8人の運営委員を設定して準備を進め運営している。図4は今まで運営に携わった19人を横軸に置き、MJIRを開催した年度を縦軸に置いた上で、何かしらの担当をしたセルを黒く塗りつぶして可視化したものである。なお、この19人にはプログラム委員やレビューと言った全体的な運営に関わらなかった人は含まない。

図4から読み取れることは、長期に渡って運営に携わっている人と入れ替わっている人がおり、新旧の人材が入り混じって運営していることである。また当初は教員のみで運営していたが近年は事務職員も運営に携わるようになって運営委員も多様化している。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	計
2012	■	■	■	■																4
2013	■	■	■	■	■															5
2014			■	■		■														3
2015			■	■		■	■	■												5
2016			■	■		■	■	■	■	■	■									8
2017				■		■	■	■		■	■	■	■							8
2018						■	■	■			■		■	■	■	■				8
2019						■	■	■					■	■	■	■				7
2020						■	■	■							■	■	■	■	■	8

図4 運営委員の変遷

### 4. まとめと今後の展開

今回で9回目を迎えたMJIRはこれまでに示したように量的には発表者や参加者が増えているだけでなく、質的にも多様性のある集会となっている。令和3年には10回目のMJIRを開催することになるため、節目として大きな意味を持つ集会になるであろう。今後もMJIRの目的に沿って、IRの推進に寄与し、人的交流の促進とネットワークを形成を進めていく。

#### 【参考文献】

- [1] MJIRの趣旨・分野, <https://mjir.info/ホーム/> (令和2年9月1日閲覧)
- [2] IIAI-AAI, <http://www.iaiai.org/conference/aai2020/> (令和2年9月1日閲覧)
- [3] DSIR, <http://www.iaiai.org/conference/aai2020/conferences/dsir-2020/> (令和2年9月1日閲覧)
- [4] 日本インスティテューショナル・リサーチ協会, <https://jairweb.jp> (令和2年9月2日閲覧)